

巻頭言

著者	森 一生
雑誌名	Probe : 舞台芸術通信
巻	4
ページ	4-4
発行年	2010
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001215/

巻頭言

ドイツでは「ベルリンの壁」が取り払われ、日本では元号が平成に代わり、二〇年が経過した。（いわゆる『冷戦』が終焉して、二〇年が経過したわけです）

この二〇年間に、社会は、めまぐるしい「変化」が常態となり、「速さ」「新しさ」に価値がますます与えられ、（大量）消費社会の進化と情報革命は、もろもろの「境界」を取り払い、（境界そのものを）無くしてきたといわれています。

こうした中であって、人々はその「生活」を、「人間関係」を、根底から「変容」させられてきました。同時に、新たな「格差」が生まれ、様々な次元で「亀裂」や「分断が」深まっている。そして、憎悪の連鎖、暴力の応酬——世界は、混沌と不安と閉塞の只中にある、といってもいいでしょう。こうした社会を、現実を「変える」事に対する「無気力」「無力感」がますます根を張りつつある。

「優れた戯曲であろうと詩であろうと、また偶然にその場に立つて喋り出された言葉であろうと、一人の人間が音声を発し、何ものかを語り、観るものがその人間のエネルギーや行為に価値を見つけたときに演劇が存在する」（「演劇とはなにか」岩波新書P5）と演出家・鈴木忠志は言う。

演劇は、行為、音、光、かたちが作り出す何ものかの創造であって、そこに生きる時間と空間の形象化であり、感動と共感を呼び起こす関係の具体化だと思ふ。

この小冊子が、こうした（舞台芸術）演劇の発展のささやかなステップになれば、と祈念し、「PROBE」第四号の巻頭言と致します。